『津田塾大学紀要』第 51 号（2019 年）317-326 頁

〈研究ノート〉

ガリシア語における
与格代名詞三人称 ñe の形態に関する考察

浅香　武和

はじめに

ガリシア語の与格代名詞三人称は、規範ガリシア語では lle（collínlle o libro 私はその本を手にした）の形態が使われるが、ガリシア方言学で分類されるガリシア西部ブロックでは ñe（collíñe o libro）が使用される。この現象に関して、Fernández Rei（1977）の簡潔な記述はあるが、その後 lle に代わり ñe を使用する調査研究論文は発表されていない。方言形態として片付けられてしまい、研究対象にされなかったようである。小論は、この ñe を使用する ñeísmo（ニェイスモ）について、口語資料からその用例を分析考察する。

Ⅰ　与格代名詞の形態

規範ガシア語（Galego Normativo）の与格の形態は次のようである。（ñe は異形）

表 1

単数形 1 人称	me	複数形 1 人称	nos
2 人称	che	2 人称	vos
3 人称	**lle [ʎe] / ñe**	3 人称	**lles [ʎes] / ñe**

ガリシア中央から西部ブロックでは、とくに口語ガリシア語で、多くのガリシア人は三人称複数形 lles と単数形 lle の識別をせずに、専ら単数形の lle を使用すると文法書に見える。ñe についても同様である。（Hermida 2004:79）

Non fixeron máis que chamar**lles** malos. → Non fixeron máis que chamar**lle** malos. 彼らは悪いことばかりした。

1. ニェイスモの使用地域と現れる環境

ガリシア語方言学上西部ブロックに分類されるポンデベドラ県のオ・グローベ、カンバードス、リアンショのアロウサ湾岸（図 1 のニェ地域）およびポンテベドラ県南部、コルーニャ県北東部のアレス、ポンテデウメの地域で ñe が使用される報告がある。さらに東部ブロックのルーゴ県セレイロ、モンドニェード市サン・ロケ地域でも散発的ではあるが使用されるとの報告がある。ガリシア西部ブロックで使用されると記されているが、東部ブロックでも散発的ではあるが使用されるとの記述に些か関心が湧き、モンドニェード出身の作家の友人に尋ねてみたところ、ñe の使用は確認できなかった。モンドニェード出身の作家 Álvaro Cunqueiro は、ñe が使われていた情報を 1975 年頃に Fernández Rei に提供しているが詳らかではない。ただし、動詞 ser の接続法現在形が seña（seia）, 動詞 dar の接続法現在形 deña（deia）, 動詞 estar の接続法現在形が esteña（esteia）のような記述が Rivas Quintas（1989:172）に確認できる。ñ を使用する口蓋音化の現象である。

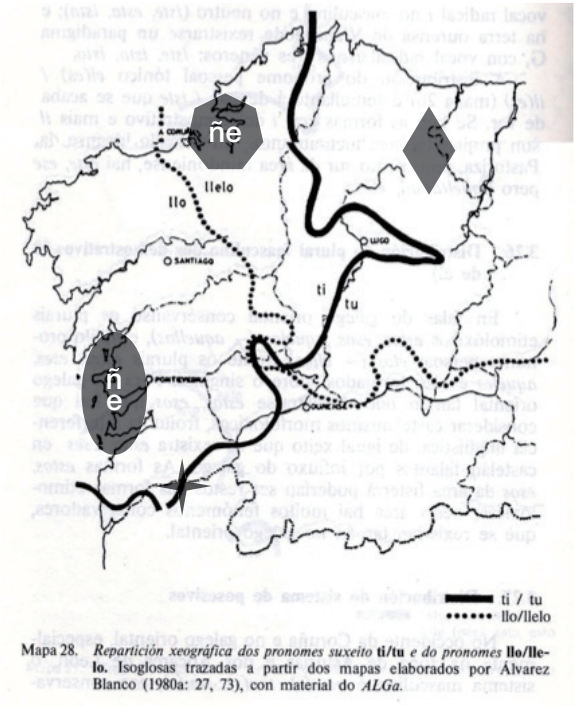
規範ガリシア語では間接補語の機能として三人称弱形代名詞の単数形 lle と複数形 lles の識別はあるが、ñe は一般に単数形と複数形は同等に使われるようだ。

ガリシア西部の海岸地域では、普通、話し言葉のなかで規則的に鼻音の後に現れ、与格代名詞は動詞に前接される。例えば、dixéroñe（規範ガリシア語 dixéronlle 彼らは彼に言った）, no ño queiras（規範ガリシア語 non llo queiras 君は彼にそのことを望まない）のように使用される。

一方、鼻音でない場合にも ñe の使用は広がり、díxoñe（規範ガリシア語 dixolle 彼に言った）, pegouñe（規範ガリシア語 pegoulle 彼を殴った）のように使われる。

副詞が現れると与格代名詞の位置は動詞の前に移動する。すなわち、xa ño dixen（すでに彼にそのことを言った , 規範ガリシア語 xa llo dixen）, nunca ño vira（決して彼のことを見なかった , 規範ガリシア語 nunca llo vira）である。ño は、与格 ñe + 対格 o の結合形、llo は与格 lle + 対格 o の結合形である。

図１　ニェ（ñe）を使用する地域・楕円形部分（Rianxo, Cambados, O Grove）, 星印（Caldelas de Tui）, 七角形（Betanzos, Sada, Pontedeume）, ひし形（Celeiros, San Roque de Mondoñedo）（Fernández Rei 1990:74）から合成



2.　lle から ñe への音変化

ñe の起源は、歯茎鼻音 n / n / に硬口蓋側面接近音 lle / ʎ / が続くと、一つの統語上のまとまりの単位になることから現れるとされている。すなわち、lle / ʎ / は硬口蓋側面接近音であり、ñ / ɲ / は硬口蓋鼻音である。両方とも硬口蓋音であり、硬口蓋音の同じ調音点の中で、鼻音 / n / と硬口蓋音 / ʎ / の特性を温存して、新しい音素 / ɲ / を作り上げながら同化したと Fernández Rei（1977）は説明している。

表 2

	alveolar 歯茎音	palatal 硬口蓋音
nasais 鼻音	n	ɲ
aproximantes laterais 側面接近音		ʎ

一方、Manuel Ferreiro（1996:248）は、ガリシア西部地域、特にアロウサ湾岸に住む人々の話し言葉に lle の代わりに ñe が方言形態として頻繁に現れ、鼻子音で終わる動詞複数形に代名詞 lle が続くときに作り出された進展と説明している。例えば「彼を連れて行く」lévanlle > lévañe（levan + ñe は動詞活用語尾 -n が消失）のように変化するとして、ñe の形態を次のように説明している。ラテン語の「爪」を意味する UNGŬLA > ung'la > unlla > uña のように進展過程を示しているが、ガリシア語 unlla から uña に進展した過程と同等に取り扱うことには疑問が残る。代名詞と名詞の進展過程は異なる。ガリシア語には unlla, uña の両方の形態が存在していて、unlla を古形と見るなら、uña は進化形と考えるのか。

3. 歯茎鼻音の後、およびその他の環境に現れる ñe について

歯茎音の後、およびその他の環境に現れる ñe について規範形と比べながら用例を分析考察する。

1）Fernández Rei（1977）の資料から

・ó miniño puxéro*ñe* un vestido（男の子に服を着せた）。間接補語 miniño が動詞より先に現れているので、与格代名詞の ñe は動詞に前接（enclítico）している。puxeron + ñe で n は脱落。

・eso vindi*ño*（それを彼に売った）。この用例は直説法完了過去単数形一人称の形態は -ín で終わることから vendin + llo > vendiño となった。

・á nai non *ñe* diron a limosna（母には情けをかけなかった）。間接補語 nai が最初に現れ、否定の副詞 non があることにより、与格は動詞に後接（proclítico）する。

・saqui*ño* ‘saqueillo’（彼からそれを取った）。sacar の直説法完了過去単数形一人称の形態は、規範ガリシア語では saquei であるが、西部ブロックでは saquin と現れ、ño が前接して saquiño となっている。ño は与格 ñe +

対格 o の結合形である。

・buti*ño* ‘boteillo’（そこにそれを入れた）。規範ガリシア語 botar の直説法完了過去単数形一人称の形態は botei、与格 lle と対格 o の結合語 llo が前接して boteillo となるが、西部ブロックでは butin の形態が現れ、butin + ño は butiño という形態になった。

・cumi*ño* ‘comínllo’（私はそれを食べた）。規範ガリシア語では、直説法完了過去単数形一人称の形態 comín に与格 lle と対格 o の結合語 llo が前接して comínllo である。西部ブロックでは cumin となり、与格 ñe と対格 o が結合して動詞に前接して cumiño という形態が現れている。この場合、与格 ñe は連帯の与格代名詞と考え、話し相手を話の中に誘い込む働きを示している。

次の 2）から 5）は、Instituto da Lingua Galega ガリシア語研究所調査班が Atlas Lingüístico Galego ガリシア語言語地図を作成する際の 1976 年から 77 年の調査結果から引用する。

2）Manuel González が Barqueiro, Betanzos 地域において収集した報告から

・di*ño*（彼にそのことを言え）< di + ñe + o（dillo < di + lle + o）.

・dí*ñe*lo（彼らにそのことを言え）<（díllelo < di + lles + o）.

・ós pobres non se *ñes* axuda（貧しい人たちから援助を得ない）。この場合 ñes は間接補語複数形の形態を示している。

3）Rosario Álvarez が Pontedeume 地域で記録した例

・dí*ñe*lo（彼らにそのことを言え）（díllelo < di + lles + o）。この例は与格三人称複数形 ñes + 対格三人称男性単数形 o が結合した形 ñes + o > ñelo で、*diño とはならない。一方 díxenllo は dixen + lle + o > díxe*ño*（私は彼にそのことを言った）dixen + ñe + o のようになっている。

4）Fernández Rei が Caldelas de Tui 地域で確認した例

・鼻音の後で bote*ñe*（彼に投げつけた）boteille > boteñe。同じく鼻音の後で dispareiñe（彼に投げた）dispareille > dispareiñe。Caldelas では直説法完了過去一人称単数形は –én または -éin となることから、動詞活用形に与格代名詞がつくと botén + ñe > boteñe, disparéin + ñe > dispareiñe という形態になる。

5）Fernández Rei が Mondengo-Sada 地域で確認した例

・díxe*ñe* 私は彼に言った（dixen + ñe）であるが、pasoulle 彼に生じた。この場合は pasar の直説法完了過去三人称単数形の活用は pasou となり、活用語尾は鼻音ではないので pasouñe とはならず pasoulle となっている。

6）ニェイスモについては、Rivas Quintas（1989:172）も少し触れているので例文をあげてみたい。ポンテベドラ県サルネース地域、オ・グローベを含むあたりで使われていると記している。Non ñe toca a el, tócañe dir.（彼に触れるな、彼は言う必要がある）。Eñe moi fresco o peixe.（魚はとても新鮮だ）, この例文では、ñe はガリシア語特有の連帯の与格代名詞と解釈する。Venñe polo camiño.（彼に道で会う）。Díxoñe que fose.（彼に行くように命じた）。Traiñe a dorna chea.（満載のドルナ舟を彼に運ばせよ）。Diñe que veña.（彼に来るように言いなさい）。Non ñe vou hoxe á vila.（今日は町には行かない）。

Ⅱ　フェルナンデス・レイ資料（Arquivo de Galego Oral）からの分析

ポンテベドラ県カンバードスにおいてフェルナンデス・レイが 1975 年から 2006 年の間に調査発表した資料から、小論ではニェイスモだけを抽出して分析を試みたい。資料から ñe が現れた箇所を取り上げ分析すると次のようである。方言資料の一部を以下にあげる。

TEXTOS DIALECTAIS

Tiñan un forno así metido, pequeno, na parede, así; e sempre amasaba el, que se **ñe** daba moi ben. Aquelaba moi ben（...）. Fasían pan na casa, que meu pai amasaba moi ben, sempre fariña milla.

Cando empesín a traballar fun eu e mais miña irmán Lola, fomos a, a … miña nai, xa na lonja, axudar**ñe** ... de pequena. Éramos pequenas, daquela teríamos des anos ou máis … Á lonja, a colle-lo marisco, a xuntar**ño**, a ter**ño**, a levar**ño** ó coche ou a un carro … a levalo na cabesa.

（Fernández Rei, 2007. p.23）

（与格 ñe は普通 lle を使うが、カンバードスの話しことば固有の用法である。与格 ñe + 対格 o > 結合形 ño）

A）1976年5月の調査報告から採集（Rosario Álvarez録音）

・chámanñ*'o* boi ;（そいつは牛貝と呼ばれる）。chaman + ñe 鼻子音 -n は消失しない、与格代名詞 ñe は動詞に前接、ñe + 定冠詞男性形 o で母音 e が消失。

・E amárranse*ñe* uns vièntos ;（そして、風がそいつを繋ぐ）。amarran + 再帰代名詞 se + 与格 ñe が前接した形態となっている。

・amárrase*ñe* entr'os vièntos e a corda;（風の中でそいつを繋ぎ、そして紐は）。

・amárrañe;（それを繋ぐ）。

・que *ñe* chaman Os Tubos;（そこはオス・トゥボスで呼ばれる）。

・que a fiskha chámase*ñe* un cacho dun...（銛は道具の一つと呼ばれる）。

・è diante lèva un pouco fèrro faséndo*ñe* coma'spèsie dun anete...（そして輪のようなものとしてそれを作りながら先に少し鉄を付けでい）。

・pois hai que petar*ñe*;（だからそれを動かさなければならない）。

・porque disque *ñe* bombeaba as latas, bombeába*ñas* co ásido que tiñan;（なぜなら見たところそれを缶詰から吸い出し、入っている酸味をそこから吸い出していた）。副詞 disque が現れるので与格代名詞 ñe は動詞に後接、ñas は与格 ñe + 対格 as の結合形。

・buèno, chámo*ñe* nôs traballar a el e viren...（だから、そこで働くように彼を呼んで、そして来れば ...）。

・hai unhas que *ñe* chamamos nôlas samuriñas;（そこには私たちがサムリーニャス貝と呼ぶものがいくつかある）。この場合の ñe は連帯の与格代名詞である。

・que *ñe* chaman As Nòbias;（そこはアス・ノビアスと呼ばれる）。

・aquí na Ría que *ñe* chamámo-lo costado de Naroèste;（ここリアでは、そこをナロエステの側と私たちは呼ぶ）

・O Limpio chamámo*ñe* nôs aquí.（ここではそれにリンピオ貝と私たちは名をつけている）。動詞 chamamos + ñe で、動詞語尾 -s が消失。

B）1976年 3月から6月の調査報告から採集

・e quen pasaran que *ñe* diran <<buenas noites>>（それから通る人は「こんばんは」と彼女に言った）。カスティーリャ語 buenas とガリシア語 noites の混在表現。

・e disir aquelas palabras que *ñe* mandaban desir;（彼女は言うように命じられたその言葉を言う）。

・e hebía unha que *ñe* vendían elas na casa;（そして彼女たちは家で彼に売るものが一つあった）。
・ela chamába*ñe* Rita;（彼女はリータと呼ばれていた）。chamaban + ñe で動詞活用語尾の鼻子音 -n が消失。
・e el chamába*ñe* Manuel;（そして彼はマヌエルと呼ばれていた）。
・E morréu*ñe* o amigho. E mentras *ñe* morréu o amigho;（そして彼は友達に死なれた。友達に死なれたけれども）。ヘアーダの特徴を表している語 amigho が現れる。この例の ñe は関心の与格。
・ó entierro que *ñe* fasían en corpo presente;（彼を現状のままにして埋葬する時に）。
・soltáro*ñe* a billa, ó, escaparon;（彼らは水道栓を緩めてから、逃げてしまった）。
・a muller que *ñe* chamaban Rita, chegou á casa e xa *ñe* chegaba o viño á eira;（リータと呼ばれる女は家に着いた、するともう畑にワインが届くところだ）。
・antes de entraren pá casa xa *ñe* deixaran a, a pipa aberta;（彼らが家に入る前に、すでに彼らは空いた樽をそこに置いていた）。entraren は屈折不定詞。

C）1997年7月から2006年12月の調査報告から採集
・e sempre amasaba el, que se *ñe* daba moi ben;（そして彼はとても得意なので、いつも捏ねていた）。ñe は連帯の与格代名詞。
・xa na lonja, axudar*ñe*...de pequena;（もう市場で、小さい時から ... 彼女を助ける）。
・eso non se *ñe* quitaba nada;（それは彼女のものを何も取らなかった）。
・Chámaban*ñe* arrieiros.（それは飾りものと呼ばれていた）。chamaban の活用語尾 -n は消失せずに ñe が前接されている。
・Elas estaban ás que *ñe* daban a sesta para vender.（彼女たちは売るためにそこに籠を出していた）。sesta は cesta である、seseo が使われている。
・caía*ñe* a sesta pa baixo;（籠が下に落ちたものだった）。
・Nós inda *ñe* axudábamos a mamá a ir a… a coller despois á noite as vieiras e axudar*ñe* a traelas pá casa;（まだ私たちはママの手伝いをして、そのあと、夜、ホタテ貝を採って、家にそれを運ぶために彼女の手伝いをしていた）。
・Hai que abrir*ñe* a cabesa toda e...（頭を全部開かねばならない）。ñe は所有の与格、cabesa は seseo である。

・Tesque estar dándo*ñe* sempre a unha man;（お前はいつも片手でそれを渡さなければならない）。
・Cando vaian secando, dispós vas*ñe* dando voltas...（乾いたら、それをひっくり返しながら並べる）。vaian は接続法現在形、dispós, vas は直説法現在二人称単数形であるが、聞き手に向かって一般的に話していると考える。ñe は間接補語単数形で、「それ」をという意味であるが、ここでは文脈から判断すると os xurelos（アジ）のことらしい、ñes を使用すべきであるが単数形の ñe に融合している。
・colles unha caixa, bótas*ñe* unha pouca palla por abaixo;（箱をとって、その箱の底に藁を少し敷く）。

考察

鼻音の後に lle が付くことにより、-n + lle > ñe と変化したと考えるのが一般的な見方であるが、鼻音でない場合にも普及した例もみられる。pasou + lle > pasoulle の場合は ñe にはならない。また、ñe, ñes と単数形と複数形を区別して使用される場合が見られるが、ñe に全て融合した場合が一般的である。

用法としては、間接補語として人を指す場合、物を指す場合、虚辞的に使われている場合、連帯の与格、関心の与格、所有の与格が考えられる。与格代名詞 ñe はガリシア西部ブロックに見られる話し言葉特有の顕著な改新的特徴といえる。

Bibliografía

Fernández Rei, Francisco（1977）: “Notas lingüísticas sobre Fefiñáns-Cambados”, *Homenaxe a Ramón Cabanillas no centenario do seu nacemento*. Santiago de Compostela, Secretariado de Publicaciones de la Universidad, 287-325.

Fernández Rei, F.（1990）: *Dialectoloxía da lingua galega*. Xerais, Vigo.

Fernández Rei e Carme Hermida:（1996）: *A Nosa Fala. Bloques e áreas lingüísticas do galego*. Consello da Cultura Galega, Santiago de Compostela. http://consellodacultura.gal/arquivos/asg/anosafala/php

Fernández Rei, F.（2007）: “Unha viaxe entre peixe e salitre do mar da Arousa” , *Ardentía*, 4, Revista Galega de

Cultuta Marítima e Fluvial, 22-29.

Ferreiro, Manuel（1995）: *Gramática histórica galega I*. Edicións Laiovento, Santiago de Compostela

Hermida, Carme（2004）: *Gramática práctica*（*Morfosintaxe*）. Sotelo Blanco, Santiago de Compostela.

Rivas Quintas, Eligio（1989）: *Lingua galega. Historia e fenomenoloxía*. Alvarellos, Lugo.